

平成 29 年度

講 義 要 項

心理学研究科臨床心理学専攻

修 士 課 程

埼 玉 学 園 大 学

目 次

臨床心理学特論Ⅰ（小玉正博）	1
臨床心理学特論Ⅱ（佐々木美恵）	2
臨床心理面接特論Ⅰ（小山望）	3
臨床心理面接特論Ⅱ（杉山雅宏）	4
臨床心理査定演習Ⅰ（佐々木美恵）	5
臨床心理査定演習Ⅱ（佐々木美恵）	6
臨床心理基礎実習Ⅰ（小玉・杉山・羽鳥・藤原）	7
臨床心理基礎実習Ⅱ（小山・藤枝・佐々木・藤原）	8
臨床心理実習（小玉・小山・藤枝・杉山・羽鳥・佐々木・藤原）	9
心理統計法特論（小泉晋一）	10
データ解析法特論（小泉晋一）	11
臨床心理学研究法特論（木村登紀子）	12
教育心理学特論（尾形和男）	13
発達心理学特論（藤原健志）	14
発達臨床心理学特論（安藤智子）	15
人格心理学特論（平山栄治）	16
人間関係学特論（小山望）	17
心身医学特論（山本晴義）	18
精神医学特論（高橋正雄）	19
犯罪・非行心理学特論（角田亮）	20
臨床健康心理学特論（小玉正博・羽鳥健司）	21
心理療法特論（羽鳥健司）	22
老年福祉心理学特論（大川一郎）	23
障害者(児)心理学特論（太田俊己）	24
学校臨床心理学特論（杉山雅宏）	25
グループワーク特論（藤枝静暁）	26
コミュニケーション学特論（古澤照幸）	27
コミュニティ援助特論（金沢吉展）	28
臨床社会心理学特論（遠藤公久）	29
異文化間心理学特論（鈴木一代）	30
特別課題研究Ⅰ	
小玉正博	31
小山 望	32
古澤照幸	33
藤枝静暁	34
杉山雅宏	35
羽鳥健司	36
佐々木美恵	37
特別課題研究Ⅱ	
小玉正博	38
小山 望	39
古澤照幸	40
藤枝静暁	41
羽鳥健司	42

授業概要

心理的援助を展開する上で求められる臨床心理学的な考え方や知識、技術について理解し、臨床心理学専門家としての基本的態度を修得することを目的とする。具体的には、現代社会における臨床心理学の主要な課題やトピックスを取り上げながら、そこから浮かび上がる臨床心理学の問題意識や今日的課題の検討を通して、臨床心理士として期待される専門性と倫理、方法論を明らかにし、それらの習得を目指した講義をする。

授業計画

到達目標

1. 臨床心理学に対する時代的および社会的要請と臨床心理士の役割について理解する。
2. 臨床心理学的な援助の展開とその技法およびアセスメントについて具体的に説明できる。
3. 心理臨床の実践の独自性と隣接領域との連携のあり方について説明できる。
4. 臨床心理士の専門性と倫理について理解を深める。

第 1 回	臨床心理学の歴史的展開と現状
第 2 回	心理学的支援をめぐる社会的状況と課題
第 3 回	心理臨床家としてのキャリア形成
第 4 回	治療構造論（1）：治療契約、ケースマネジメント
第 5 回	治療構造論（2）：ケースの見立て、事例の定式化
第 6 回	治療関係の構築（1）：援助の過程
第 7 回	治療関係の構築（2）：変化と抵抗
第 8 回	臨床心理士に必要な資質と能力
第 9 回	失敗事例から学ぶこと
第 10 回	事例研究とスーパービジョンの意義
第 11 回	心理臨床における職業倫理（1）守秘義務とインフォームドコンセント
第 12 回	心理臨床における職業倫理（2）「すること」と「してはいけないこと」
第 13 回	地域支援の考え方と課題
第 14 回	隣接職種との連携と協働のあり方
第 15 回	授業のまとめ

履修上の注意

授業ガイダンスで紹介する参考文献等を主体的に自学自習し、問題意識を深めること。講義に際しては積極的に発言し、教員との意見交換を行い、受講生同士の相互の理解に務めることが期待される。

評価方法

到達目標と関連して、授業中の質疑応答への参加度と理解度(40%)、提出されたレポートの完成度(60%)などを通して総合的に評価する。

テキスト

講義内容に関連した参考文献を適宜紹介し、ハンドアウト資料を配付する。なお、倫理問題については、以下の文献が参考資料となる。「カウンセラー：専門家としての条件」誠信書房、「援助専門家のための倫理問題ワークブック」創元社

授業概要

心理援助の基本的考え方、構え、および基礎理論について、主に精神分析的、力動的オリエンテーションに基づいて講義する。授業の構成は、各回のテーマに沿った課題文献講読と授業内でのディスカッションとなる。

授業計画

到達目標

1. 臨床心理士を志す者として、心理援助、心理面接についての各自の考えをもつ。
2. パーソナリティおよび内的世界について理解する視点をもつ。
3. 精神分析的、力動的オリエンテーションに基づく心理面接の基礎理論を習得する。

第1回	心理援助の基本的考え方
第2回	内的世界の基礎理論①：フロイト
第3回	内的世界の基礎理論②：クライン
第4回	内的世界の基礎理論③：ビオン
第5回	パーソナリティの基礎理論①：構造論
第6回	パーソナリティの基礎理論②：自己愛、スキゾイド等
第7回	セラピスト-クライアント関係の理解①：転移
第8回	セラピスト-クライアント関係の理解②：逆転移
第9回	心理面接の展開①：傾聴、共感
第10回	心理面接の展開②：抵抗、防衛、ワークスルー
第11回	心理面接の展開③：解釈、介入
第12回	心理面接の展開④：中断、終結
第13回	子どものセラピー①：子どもの内的世界
第14回	子どものセラピー②：セッティング、技法、親支援
第15回	スーパーヴィジョン、トレーニング

履修上の注意

各回の課題文献を全員が読んだ上で授業に臨み、積極的に議論に参加すること。

評価方法

授業参加態度（積極的発言、意欲、主体性）30％、担当発表（資料作成、プレゼンテーション、質疑応答）30％、筆記試験 40％によって評価する。

テキスト

とくになし。適宜文献を紹介する。

授業概要

心理療法における各理論的立場について学ぶ。具体的には、クライエント中心療法、精神分析的療法、対象関係論、分析的心理療法、遊戯療法、行動療法、認知行動療法、ゲシュタルト療法、交流分析、集団療法、自律訓練法などの諸理論について十分習得し、心理的援助を求めている人への症状や問題に対する各アプローチの相違点、類似点について理解する。受講者は各療法についての事前研究により担当部分のレポート発表および討論を行い、療法間の関連性についてより洞察を深める。さらにこれらの討論を踏まえて、各療法を俯瞰する統合モデルに触れながら、どのような対象に対して、どのようなアプローチが有効かについて、各技法の意義と限界を十分理解できるように講義を行う。

授業計画

到達目標

1. 心理臨床を支える主要な理論の人間観を理解し、その相違点と類似点について説明できる。
2. 各理論による具体事例の学習を通してそれぞれの治療的かかわりの実際について理解する。
3. 現代心理療法の潮流としての心理療法の統合モデルについて説明できる。

第 1 回	心理療法各論における比較の視点（相違点・類似点）
第 2 回	クライエント中心療法理論 C. R. ロジャーズ
第 3 回	精神分析および分析心理学 S. フロイトと C. G. ユング
第 4 回	対象関係論 M. クライン, D. W. ウィニコット
第 5 回	実存主義 V. フランクル
第 6 回	遊戯療法 V. M. アクスライン
第 7 回	行動療法 H. J. アイゼンクと J. ウォルピ
第 8 回	認知療法 A. T. ベック
第 9 回	ゲシュタルト療法 F. S. パールズ
第 10 回	交流分析 E. バーン
第 11 回	家族療法 G. ベイトソン
第 12 回	集団療法 J. L. モレノ
第 13 回	自律訓練法 J. H. シュルツ
第 14 回	森田療法 森田正馬
第 15 回	現代心理療法の統合モデル

履修上の注意

1. 授業では、受講者が学習課題として指定される各心理療法の概要についてレポート発表を行い、それに基づいて討論を行うので、担当箇所については十分な事前学習を行い、資料を準備すること。
2. 講義は事前学習とレポート発表を受けて、討論を中心に進められるので、主体的に参加すること。

評価方法

到達目標に照らして、質疑討論における理解度(40%)、提出された課題レポートの完成度(60%)などから総合的に評価する。

テキスト

必要に応じ適宜参考資料を配布する。また、講義に関する参考文献として、「現代のエスプリ別冊 貢献者の肖像と寄与」（至文堂）、「心理療法の諸システム」（金子書房）を挙げる。特に、後者は欧米において最先端の心理療法の統合モデルを扱っており、アプローチ全体を俯瞰する上で参考になる。

授業概要

臨床心理面接は、臨床心理学的援助をおこなう際の基本的な関わりです。臨床心理学特論Ⅰで学んだ知識をさらに深め、臨床心理面接の基本を体験的に学び、面接者としての関わりを具体的に想起できるようになることを目的とします。

授業計画

到達目標

1. 臨床心理学の理論と心理療法のつながりを理解する。
2. 主な心理療法についての理論・技法・適用等を知り、臨床心理面接に求められる専門性の土台を形成する。

第1回	心理面接の構造と機能について
第2回	初回面接・面接の契約について
第3回	面接のプロセスについて（記録の書き方・中断と終結など）
第4回	連携と協働について
第5回	来談者中心療法1（ロジャーズの理論に基づく面接過程）
第6回	来談者中心療法2（技法の検討）
第7回	パーソンセンタード・アプローチ
第8回	行動論的アプローチ1（行動査定、手続き、プロセスなど）
第9回	行動論的アプローチ2（事例の検討）
第10回	グループアプローチ1（エンカウンター・グループワークなど）
第11回	グループアプローチ2（適用について）
第12回	親子並行面接について
第13回	若者たちの心理療法（学生相談の事例から）
第14回	学校教師へのコンサルテーションについて
第15回	臨床心理的地域援助について
第16回	まとめ

履修上の注意

臨床心理面接に必要な基本概念について、受講者による発表、討論、場合によってはロールプレイを行う予定です。受講者各自が臨床心理面接を行う際の自身の課題を自覚し、能動的に講義に参加していただくことを期待しております。

評価方法

講義への参画度（発表・討論など）40%、課題レポート60%、

テキスト

必要な資料は配布します。参考書は紹介します。

授業概要

知能検査を中心として、発達あるいは知的水準及びその特性について査定する方法を学ぶ。とくに、現在使用されている有効な知能検査法として田中ビネー知能検査Ⅴと WISC-Ⅳを中心的に取り上げ、その実施法、分析法、解釈法、心理検査報告書作成までの一連のプロセスについて、実践的に指導する。検査対象者への援助指針を提供し得る適切な心理検査報告書が作成できるよう、個別指導を有効に組み込みながら指導する。

授業計画

到達目標

1. 知能検査の歴史的展開と今日的課題について学び、その利用の意義を理解する。
2. 田中ビネー知能検査Ⅴ及び WISC-Ⅳの実施法、分析法、解釈法を学ぶ。
3. 有用な心理検査報告書の書き方を習得する。
4. 知能検査結果と援助実践の有効なリンクについて習得する。

第 1 回	知能検査による心理査定の意義とその限界
第 2 回	田中ビネー知能検査Ⅴ①：理論と実施法
第 3 回	田中ビネー知能検査Ⅴ②：結果の分析と解釈
第 4 回	田中ビネー知能検査Ⅴ③：履修生同士によるテスト体験
第 5 回	田中ビネー知能検査Ⅴ④：心理検査報告書作成/個別指導Ⅰ
第 6 回	田中ビネー知能検査Ⅴ⑤：心理検査報告書作成/個別指導Ⅱ
第 7 回	田中ビネー知能検査Ⅴ⑥：検査結果報告における留意点
第 8 回	WISC-Ⅳ①：理論と実施法
第 9 回	WISC-Ⅳ②：結果の分析と解釈
第10 回	WISC-Ⅳ③：履修生同士によるテスト体験
第11 回	WISC-Ⅳ④：心理検査報告書作成/個別指導Ⅰ
第12 回	WISC-Ⅳ⑤：心理検査報告書作成/個別指導Ⅱ
第13 回	WISC-Ⅳ⑥：心理検査報告書作成/個別指導Ⅲ
第14 回	WISC-Ⅳ⑦：検査結果報告における留意点
第15 回	知能検査におけるテスト・バッテリーの考え方と留意点

履修上の注意

あくまでも授業内学習であることに十分配慮し、実質的な知能検査とはならないような工夫をもって指導するが、自らの知能査定に近い体験を伴うことを予め了解の上、授業に臨んでもらいたい。

評価方法

心理検査報告書の完成度 50%、授業参加態度（積極的発言、意欲、主体性）50%によって評価する。

テキスト

必要な文献を適宜紹介するとともに、関連資料を配布する。

授業概要

投影法パーソナリティ検査であるロールシャッハ・テストの理論および実施法、分析法、解釈法を学ぶ。受講生同士がテスターあるいはテストティーとなって、実際に演習によりロールシャッハ・テストとバウム・テストを実施する。その後個別指導を中心として、自らのテストティー体験データについて、心理検査報告書を作成する。それらすべてのプロセスを通して、ロールシャッハ・テストとバウム・テストのテスト・バッテリーによる心理査定を実践的に学ぶ。

授業計画

到達目標

1. ロールシャッハ・テストの実施法、分析法、解釈法を学ぶ。
2. バウム・テストとのテスト・バッテリーによるパーソナリティ検査の一連の流れを習得する。
3. 有用な心理検査報告書の書き方を習得する。
4. パーソナリティを査定する上での基本的な倫理を体得する。

第 1 回	ロールシャッハ・テストによる心理査定の意義とその限界
第 2 回	実施、分析、解釈①：施行法
第 3 回	実施、分析、解釈②：分類の前提、反応領域の分類
第 4 回	実施、分析、解釈③：反応領域の分類
第 5 回	実施、分析、解釈④：反応決定因の分類
第 6 回	実施、分析、解釈⑤：反応決定因の分類、反応内容の分類、形態水準の評価
第 7 回	バウム・テストとのテスト・バッテリーによる実施法
第 8 回	分析、解釈の視点①：解釈の前提、意味づけ
第 9 回	分析、解釈の視点②：一般的記号の総合的解釈、継列分析
第10回	心理検査報告書作成/個別指導①：スコアリング確認と報告書案作成
第11回	心理検査報告書作成/個別指導②： 知的側面、情緒的側面、対人的側面、現実吟味力等各視点からの記載
第12回	心理検査報告書作成/個別指導③：力動的視点、継列分析からの記載
第13回	心理検査報告書作成/個別指導④： パーソナリティの全体評価とその記載
第14回	心理検査報告書作成/個別指導⑤：心理検査報告書の仕上げ
第15回	心理検査報告書作成/個別指導⑥：結果フィードバックとその留意点

履修上の注意

あくまでも授業内学習であることに十分配慮した上で指導するが、自らのパーソナリティ査定体験を伴うことを予め了解の上、授業に臨んでもらいたい。

評価方法

心理検査報告書の完成度 50%、授業参加態度（積極的発言、意欲、主体性）50%によって評価する。

テキスト

「改訂 新・心理診断法 ロールシャッハ・テストの解説と研究」（金子書房）
「ロールシャッハ・テストの学習 片口法スコアリング入門」（金子書房）
その他、適宜テキストを紹介する。

授業概要

実習 I では、体験学習を通して臨床心理学的援助を効果的に行うための基礎的かかわり技術を身につけることを目的とする。ロールプレイを中心にして、コミュニケーションスキル、ヘルピングスキル等の諸技法における実践的な対応について指導する。

授業計画

到達目標

1. 対人援助職に求められる基礎的かかわり技術について理解できる。
2. 対話場面においてコミュニケーションスキル、ヘルピングスキルを効果的に使うことができる。
3. 援助者役割と被援助者役割を相互体験することにより、援助機能とその意味について理解する。

第 1 回(4/13)	基礎実習 I の目的と意義、到達点について（全教員出席） 臨床系教員の治療的立場と指導方針の説明 課題図書を紹介
第 2 回(4/20)	マイクロカウンセリングの技法：その理論概説（担当者：小玉・羽鳥）
第 3 回(4/27)	マイクロ技法の実際：質問技法（担当者：小玉・羽鳥）
第 4 回(5/11)	マイクロ技法の実際：言い換え技法（担当者：小玉・羽鳥）
第 5 回(5/18)	マイクロ技法の実際：要約技法（担当者：小玉・羽鳥）
第 6 回(5/25)	マイクロ技法の実際：反映技法（担当者：小玉・羽鳥）
第 7 回(6/1)	マイクロ技法の実際：焦点づけ技法（担当者：小玉・羽鳥）
第 8 回(6/8)	マイクロカウンセリングのまとめと評価（主担当者：小玉・羽鳥）
第 9 回(6/15)	模擬面接の進め方：場面構成と演者役割（主担当者：杉山・藤原）
第 10 回(6/22)	ミニカウンセリング実習：不安への対処（主担当者：小山・藤原）
第 11 回(6/29)	ミニカウンセリング実習：怒りへの対処（主担当者：杉山・藤原）
第 12 回(7/6)	ミニカウンセリング実習：喪失と悲嘆を扱う（主担当者：杉山・藤原）
第 13 回(7/13)	ミニカウンセリング実習：アサーション（友人関係）（主担当者：杉山・藤原）
第 14 回(7/20)	ミニカウンセリング実習：アサーション（家族関係）（担当者：杉山・藤原）
第 15 回(7/27)	授業のまとめ（全教員出席）
第 16 回(8/3)	模擬面接技術試験（全教員出席）

履修上の注意

1. 本科目は、基本的に 2 コマ連続の実習形式で行われる。
2. ロールプレイは基本的にトライアド形式で行うので、自己都合による欠席は認められない。諸般の事情により出席困難な場合は、事前に承諾を得ること。

評価方法

かかわり技術の習得を評価するために面接技術試験を行う。評価基準に満たない場合は再試験を行う。

テキスト

授業内容に関連した参考文献を適宜紹介するとともにハンドアウト資料を配付するが、事前学習と事後学習のために以下の文献を紹介する。

〈文献〉「マイクロカウンセリング技法」（風間書房）

授業概要

臨床心理基礎実習Ⅰに続き、相談業務に必要な知識と相談技術の向上をめざす。
 学内の臨床心理カウンセリングセンターでの相談業務に携わりながら、相談の流れと実際の面接の方法を学ぶ。
 また学外での臨床実習に備えて、心理相談員としての基本的態度を習得する。
 学外実習の施設を見学して、各施設の機能や臨床心理士としての役割を事前に理解する。

授業計画

到達目標

- 1 心理的相談活動の内容と流れを理解し、事例報告を作成できる能力を身につける。
- 2 相談研修員として臨床心理カウンセリング・センターの運営に役割を果たす。
- 3 相談研修員としての態度と行動規範を理解して、遵守することができる。
- 4 学外実習として、臨床心理士の勤務する各施設を訪問して心理的援助の実際に触れる。

第1回	ガイダンス
第2回	受付業務・相談業務の理解
第3回	インテーク面接の方法についての理解
第4回	インテーク面接の技術について 記録の取り方、報告書の書き方
第5回	インテーク会議にて発表（1）と討論
第6回	インテーク会議にて発表（2）と討論
第7回	インテーク会議にて発表（3）と討論
第8回	インテーク会議にて発表（4）と討論
第9回	学外実習のガイダンス 実習経験者の報告
第10回	学外実習施設の見学（1）教育研究所
第11回	学外実習施設の見学（2）福祉施設
第12回	学外実習施設の見学（3）医療機関
第13回	学外実習施設の見学（4）産業分野
第14回	実習報告会（見学実習を終えて）
第15回	紀要原稿作成指導
第16回	臨床心理基礎実習Ⅱのまとめ

履修上の注意

相談業務や相談技術の習得をめざした演習や、2年次の学外実習の事前準備を兼ねて施設見学もあるので、原則として欠席は認めない。
 インテーク会議の資料作成についても学ぶ。

評価方法

出席時の態度、課題レポートの内容を総合的に評価する。

テキスト

使用しない。必要な文献を適宜紹介する。

授業概要

本学の臨床心理カウンセリング・センターでの実習を通して、心理臨床における実践力を身につけることを目的とする。学内実習においては、相談研修生として心理カウンセリング・センター運営に参加し、受付業務や業務管理を行う。さらに、定例の事例会議への参加、受理面接および相談事例の陪席や観察、相談事例の担当、担当事例について個別および集団によるスーパービジョンなどを受ける。また、学外実習においては、協力施設等において相談面接の陪席、心理査定、事例研究会への参加、その他の心理臨床活動を行えるよう指導する。

授業計画

到達目標

1. 相談研修員として相談活動の内容と実習の流れを理解し、心理カウンセリング・センターの運営に十分な役割を果たす。
2. 相談研修員としての行動規範を遵守し、主体的に相談業務に携わることができる。
3. 学外実習を通して心理臨床の実際に触れ、心理的支援者としての態度とスキルを養う。

※1回あたり2コマ連続で行う。

回数	春期	秋期
第1回	臨床心理実習の意義	心理的支援者としての実習課題の確認
第2回	相談指導教員の役割とセンター運営の意味	学外実習：学校領域における活動報告
第3回	学内実習：相談研修員の役割と義務	学外実習：福祉領域における活動報告
第4回	学内実習：受理会議の進め方	学外実習：医療領域における活動報告
第5回	学内実習：事例報告および事例研究	中間報告①：学外実習における課題とその対応
第6回	事例会議：中断事例と終結の扱い方	学外実習：学校領域における活動報告
第7回	学外実習にむけての事前学習	学外実習：福祉領域における活動報告
第8回	学外実習：学校領域における活動報告	学外実習：医療領域における活動報告
第9回	学外実習：福祉領域における活動報告	中間報告②：学外実習における課題とその対応
第10回	学外実習：医療領域における活動報告	学外実習：学校領域における活動報告
第11回	学外実習における課題とその対応：中間報告	学外実習：福祉領域における活動報告
第12回	学外実習：学校領域における活動報告	学外実習：医療領域における活動報告
第13回	学外実習：福祉領域における活動報告	事例会議：実習生の役割と事例との関わり
第14回	学外実習：医療領域における活動報告	事例会議：臨床心理士と関連専門家との連携
第15回	学外実習の事後指導とまとめ	実習全体のまとめ

履修上の注意

1. 自己都合による欠席は認められない。諸般の事情により出席困難な場合は、事前に申し出て承諾を得ること。
2. 実習が円滑に実施できるように、研修員の相互理解、相互協力が求められる。
3. 学外実習にあたっては、社会人としての礼節をもって施設訪問を行うこと。また、実習施設および担当指導者に敬意を払い、指導方針を遵守すること。
4. 相談研修に関する個別のポートフォリオを作成し、研修レポートの記録内容に基づき指導が進められる。

評価方法

到達目標と照らし、相談研修生としての学内および学外実習への取り組み状況(40%)、受理会議およびケース会議への参加と発表(30%)、研修レポートの適切性(30%)などによって総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。実習過程において適宜資料等を配布する。

授業概要

実証的な心理学研究を行う上で使用される統計の知識や分析法を学び、実際にコンピューターを操作し、統計のソフトウェアを使って分析できる能力が必要である。そのため、本講義では、心理統計法の理論背景を学び、より実践的で有益な心理統計手法を選択・実施できるようになることを目的としている。心理統計の手法を理解した上で、実際に Eexcel および SPSS などの統計ソフトウェアを操作し、心理学的統計処理を行えるように講義をする。

授業計画

到達目標

1. 各心理統計に関する理論背景（統計的有意性、検定の原理、標本分布）と方法を理解する。
2. 適切な分析方法（ χ^2 検定、 t 検定、 F 検定、相関分析など）を選択することができる。
3. Excel ソフトを用いて統計処理を行うことができる。
4. 統計ソフト SPSS を用いて統計処理を行うことができる。

第 1 回	臨床心理学における統計法の学習目的と方向性
第 2 回	心理統計法の主な理論
第 3 回	記述統計値算出のねらい
第 4 回	名義変数の分析：カイ二乗検定の理論と実践
第 5 回	変数間の関連を知る：相関分析の理論と実践
第 6 回	相関分析の応用
第 7 回	分析手法と操作のまとめ（確認テスト）
第 8 回	平均値の比較： t 検定の理論と実践
第 9 回	分析手法と操作のまとめ（確認テスト）
第10 回	1 要因分散分析理論とその実際の活用
第11 回	2 要因分散分析理論とその実際の活用
第12 回	交互作用の理解
第13 回	多重比較・表作成の方法とその理解
第14 回	統計分析法の選択判断
第15 回	分析手法と操作に関する全体的整理とまとめ

履修上の注意

各回の授業で扱う内容について、教科書・参考書の対応する箇所を事前学習しておくことが望ましい。なお、授業内容を復習し、自主的に統計手法の習熟に努めること。

評価方法

期待される諸能力（知識、技能）が到達目標に至っているかについて、確認テスト(50%)および最終テスト(50%)によって総合的に評価する。

テキスト

「SPSS と Amos による心理・調査データ解析：因子分析・共分散構造分析まで」（東京図書）
「よくわかる心理統計」（ミネルヴァ書房）

授業概要

実証的な心理学研究を行う上では、よく使用される統計の分析法を学ぶだけでなく、高度なデータ解析法を習得する必要がある。本講義では、実際に統計ソフトウェアを操作し、心理統計法を用いたデータ解析を行えるようになることを目的とする。また、簡易な統計分析手法に留まらず SPSS や AMOS などの高度な統計ソフトウェアを用いてより複雑なデータ解析ができるように講義する。

授業計画

到達目標

1. 多変量解析法に関する統計理論を理解する。
2. 多変量データに関する適切な分析手法の選択能力を習得する。
3. 統計ソフト SPSS を用いた多変量解析ができる。
4. 統計ソフト Amos を用いた多変量データの処理ができる。

第 1 回	臨床心理学における定量的なデータ解析の意味
第 2 回	主な多変量解析法の種類とその目的
第 3 回	因子分析法の理論と実際
第 4 回	因子分析の回転方法
第 5 回	信頼性と妥当性の検討
第 6 回	操作のまとめと確認テスト
第 7 回	単回帰と重回帰分析
第 8 回	重回帰分析
第 9 回	重回帰分析の応用および図表作成方法
第 10 回	操作のまとめと確認テスト
第 11 回	Amos の操作方法
第 12 回	観測変数を用いたパス解析
第 13 回	共分散構造分析の基本
第 14 回	共分散構造分析の実際と応用
第 15 回	操作のまとめと確認テスト

履修上の注意

各回の授業で扱う内容について、教科書・参考書の対応する箇所を読んでもくることが望ましい。なお、授業で出された課題を復習し、統計手法の習熟に努めること。

評価方法

期待される諸能力（知識、技能）が到達目標に至っているかについて、確認テスト(50%)および最終テスト(50%)によって総合的に評価する。

テキスト

「SPSS と Amos による心理・調査データ解析：因子分析・共分散構造分析まで」（東京図書）
「よくわかる心理統計」（ミネルヴァ書房）

授業概要

臨床心理学研究は、現在、その理念も方法も多様であり、それぞれが独自な特徴をもちながら研究領域全体の一部を担っているが、未だ多くの課題を抱えている。本講義では、臨床心理学の理念と研究方法について、その多様性と可能性を検討しながら、研究の目的と方法、一般的プロセスを概観する。次に、研究テーマによる量的方法と質的方法あるいはミックス法の適切性の識別・選択と研究デザイン・展開方法について相互に吟味・検討する。受講者の必要に応じながら、いわゆる質的方法を中心に、事例研究や実践活動の評価研究の方法などについても理解を深めたい。それによって、各自の修士論文作成と、その後の専門職として要請される課題への研究的な取り組みに資することを目指す。

授業計画

到達目標

1. 臨床心理学における研究の視点と目的、方法の多様性を知り、研究者の個性・独自性の重要性を理解する。
2. 実践の場における研究の必然性と必要性を理解し、臨床的研究デザイン（目的の立て方、方法の選択、検証の仕方）を策定することができる。
3. 臨床心理学の研究目的と方法に照らして量的研究法と質的研究法の特徴を十分に理解し、適切に利用することができる。
4. 「心理臨床の実践」と「実践しながらの臨床心理的研究」の関連性と意義を理解し、事例性を尊重した実践研究の態度を習得する。

第1回	臨床心理学研究の理念と研究方法の多様性
第2回	臨床心理学の諸領域と研究方法
第3回	臨床心理学の研究プロセス
第4回	研究テーマと研究方法（1）
第5回	研究テーマと研究方法（2）
第6回	臨床心理学の研究手法（1）
第6回	臨床心理学の研究手法（2）
第7回	量的研究のデザインと展開：具体的研究例を用いて
第8回	質的研究のデザインと展開：具体的研究例を用いて
第9回	いわゆるミックス法について
第10回	臨床心理学の研究手法（3）
第11回	臨床心理学の研究手法（4）
第12回	臨床心理学の研究手法（5）
第13回	臨床心理学における評価（効果）研究
第14回	臨床心理学における研究の倫理
第15回	臨床心理学研究法のまとめ、各自の今後の見通しと課題

履修上の注意

受講者の積極的で主体的な参加を前提に講義が進められる。そのためにも、各自が、自分の興味・関心を模索しながら研究テーマを見出しそれを深めようとするのが重要である。また、参考文献を通じて研究方法の全体像を把握しながら、自分の研究テーマにとって適切で有効な方法を探り、具体的に修士論文作成へ向けて準備を進めることが期待される。

評価方法

授業での積極的な取り組み、すなわち、各自で分担して報告する資料の熟読・吟味と発表の準備・成果、討論への参加の程度（50%）、期末のレポート課題への取り組みと完成度（50%）によって総合的に評価する。

テキスト

テキストは定めず、抄読用文献・参考文献などを必要に応じて、その都度指示する。

授業概要

教育に関わる諸問題について、いじめ、学級経営、学習の動機づけ、教師の適性など幾つか絞りその現状と対応について文献により確認すると同時に、これに関わる先行研究を取り上げ、最新の状況について理解と知識を深める。このような取り組みを通して教育問題について心理学的な視点に基づく深い洞察力を養う。

授業計画

到達目標

1. いじめ、教師の指導力、児童・生徒の学習への動機づけ、生徒と教師の信頼関係そして教師のストレスなど教育の根幹をなす課題について現状を把握する。
2. 教育の問題に関連して、問題の本質についての把握力を心理学的な視点から深める。
3. 教育の問題についての問題解決のための心理学的な手法についての洞察力を深め、具体的な取り組みの方向性について理解を深める。

第 1 回	教育心理学に関わる現代的諸問題を考える
第 2 回	心理学各領域の観点とその統合の必要性
第 3 回	教育現場の現状と問題点
第 4 回	いじめを捉える(1)いじめの現状
第 5 回	いじめを捉える(2)いじめの対策
第 6 回	学級経営と教師(1) ①教師に求められるもの ②学級集団の特性とその変化
第 7 回	学級経営と教師(2) ①効果的な指導方法とは ②何が効果的に作用するのか
第 8 回	学級経営と教師(3) ①リーダーシップとその理論 ②適切なリーダーシップ理論
第 9 回	学習の動機づけと動機づけ形成(1) ①内発的動機づけ ②自己調整学習
第10 回	学習の動機づけと動機づけ形成(2) 親の関わりと子どもの学習への動機づけ
第11 回	学習の動機づけと動機づけ形成(3) 友人関係と学習への動機づけ・学習方略
第12 回	教師の適性(1) ①生徒との良好な関係形成のために②効果的な授業展開のために
第13 回	教師の適性(2) ①生徒の把握の仕方と生徒の志気②不合理な信念と生徒との関係
第14 回	教師の職場での苦悩とストレス
第15 回	まとめと話題提供

履修上の注意

内容的に最新の知識を扱うので、自ら関心を持って文献を調べるなど、積極的に参加すること。

評価方法

毎回の受講姿勢(積極性、発表の姿勢)、文献検索の内容、レポートなどを加味して総合的に評価する。

テキスト

特に使用しないが、その都度参考図書を紹介する。

授業概要

本講義では、発達心理学に関するトピックについて、教科書で紹介されるような基本的研究を精読するとともに、近年の研究動向を研究論文等に基づいて紹介する。これらを通じて、発達心理学に関する研究方法や研究成果のまとめ方についての理解を深めるとともに、発達心理学的観点からみた個人の成長や困難、そして援助法について考察する。

授業計画

到達目標

1. 発達心理学に関連する諸理論ならびに諸研究の概要を理解する。
2. 諸研究の購読を通じて研究方法論や統計手法に関する理解を深める。
3. 1と2を踏まえて、論文作成に関する基本的知識とスキルを獲得する。

第1回	オリエンテーション
第2回	発達課題
第3回	遺伝と環境
第4回	愛着と親子関係
第5回	遊びの発達と治療への応用
第6回	自己概念の発達
第7回	意欲の発達
第8回	自己制御の発達
第9回	パーソナリティの発達
第10回	感覚機能の発達
第11回	知的機能の発達
第12回	社会性と友人関係の発達
第13回	道徳性の発達
第14回	感情の発達
第15回	まとめ

※受講者の人数や興味関心に応じて一部変更を行う場合がある。

履修上の注意

- ・発達心理学に関する諸理論について予習し、十分な理解をもって講義に望むこと。
- ・英語文献を紹介することもあるため、必要に応じて辞書等を持参すること。

評価方法

講義におけるワークとディスカッションへの参加(約 30%)ならびにレポート課題(約 70%)により総合的に評価する。

テキスト

- ・テキストは指定しない。講義は各回に配布する資料を用いて行われる。
- ・参考資料は下記を一例として講義中に適宜紹介するが、受講生からの紹介も歓迎する。

新井邦二郎 (編) 図でわかる発達心理学 福村出版

吉澤寛之他 (編) ゆがんだ認知が生み出す反社会的行動：その予防と改善の可能性 北大路書房

堀野緑・濱口佳和・宮下一博 (編) 子どものパーソナリティと社会性の発達 北大路書房

ヴォークレール (明和政子監訳) 乳幼児の発達—運動・知覚・認知 新曜社

授業概要

胎児から成人までの発達を、身体・運動・認知・社会性・人格の各領域について相互関連的に概説するとともに、各発達段階における心理臨床的課題やリスク、およびそれに対する支援方法を取り上げる。講義を通して、個性をもって生まれた一人の人間が、周りの人や環境との相互作用を通して成長していく発達の様子が具体的にイメージできることを目指す。

授業計画

到達目標

1. 身体・運動・認知・社会性・人格に関する標準的な発達について理解する。
2. 発達の過程で生じる心理臨床的な課題について理解する。
3. 心理臨床的な課題に対して、どのような支援の方法があるかを多面的に理解する。
4. 1 から 3 を踏まえて、個別事例に対する適切な心理臨床的支援を立案する。

第 1 回	発達臨床心理学の意義
第 2 回	胎生期の発達と周産期の母親のメンタルヘルス
第 3 回	乳児期の発達と心理臨床的課題
第 4 回	アタッチメントの形成と障害
第 5 回	幼児期の発達課題と心理臨床的課題
第 6 回	ことばの獲得に関する課題
第 7 回	養育に関する諸問題と養育者への心理教育と支援
第 8 回	児童期の発達課題と心理臨床的課題と支援の視点
第 9 回	児童期のメンタルヘルスに関する諸問題
第 10 回	青年期の発達課題と心理臨床的課題と支援の視点
第 11 回	青年期のメンタルヘルスに関する諸問題
第 12 回	成人期の発達課題と心理臨床的課題と支援の視点
第 13 回	成人期のメンタルヘルスに関する諸問題
第 14 回	家族の発達とその支援
第 15 回	授業のまとめ

履修上の注意

講義では、経験を振り返り、積極的に質問や意見などのフィードバックをしてほしい。

評価方法

到達目標に照らし、授業中の発言や質疑応答（30%）、提出物（20%）、期末レポート内容（50%）で総合的に評価する。

テキスト

教科書は特に指定しない。各回に配布する資料に基づいて授業を進める。また、講義の中で参考書を随時紹介する。

指導概要

人格とは何か、また、臨床実践の中でクライアントの問題や症状の基礎にある人格をどのように理解し、それにどのように介入することができるのかについて学ぶ。精神分析学、対象関係論の観点を導入することで、人格の査定・アセスメント、心理療法やカウンセリングにおける治療的人格変容についてどのように理解することができるのかについて論じる。適宜、臨床事例を用いて解説を加える。

指導計画

到達目標

1. 臨床実践に役立つ人格理論、人格発達、人格病理について理解する。
2. クライアントの人格の病理と統合や成長について対象関係論の観点から学ぶ。
3. 精神分析的な心理療法における人格変化と心理的成長について理解する。

第 1 回	人格 (Personality) とは何か
第 2 回	人格の構造論、発達論、人格の力動論、適応論
第 3 回	トピック
第 4 回	本能、欲動、空想、対象関係
第 5 回	転移と逆転移
第 6 回	解釈と洞察、治療的人格変容
第 7 回	トピック
第 8 回	妄想分裂ポジション、迫害不安、原始的防衛機制
第 9 回	羨望、妄想分裂ポジションの精神病理
第10 回	抑うつポジション
第11 回	抑うつ不安、躁的防衛、償い
第12 回	トピック
第13 回	治療的人格変容の実際 1
第14 回	治療的人格変容の実際 2
第15 回	トピック

履修上の注意

1. 質疑や感想、意見などを交換しながら、理解を深めることが期待される。

評価方法

授業での質疑応答への積極的な関与(30%)、小グループ討論や体験学習 への参加(30%)、課題レポートの完成度(40%)などに基づいて総合的に評価する。

テキスト

資料については、適宜、教室で配布する。

参考図書：H. スィーガル著、『メラニー・クライン入門』岩崎学術出版社。

授業概要

人間関係の誕生に始まり、各発達段階における人間関係の様相について事例や自己のエピソードを含め体験的に理解する。人間関係の形成や心理的援助技術をロールプレイングなどを通じて体験的に学ぶ。

人間関係の形成の支援の方法として、1対1の対話を中心としたアプローチから、グループで行うメンバー相互の交流や対話を主としたグループアプローチまでを体験的に学ぶことを目標としたい。

授業計画

到達目標

1. 人間関係学の基礎理論や人間関係の発達の側面を理解する
2. 人間関係の支援の方法として、グループワークやロールプレイを通して適切な人間関係づくりのための援助方法を習得する。

第1回	人間関係の発達、エリクソンの心理社会的発達理論（1）
第2回	エリクソンの心理社会的発達理論（2）
第3回	幼児期の人間関係のエピソード的理解
第4回	学童期の人間関係のエピソード的理解
第5回	青年期前期の人間関係のエピソード的理解
第6回	青年期後期の人間関係のエピソード的理解
第7回	成人期の人間関係のエピソード的理解
第8回	職場での人間関係の事例やエピソード
第9回	親子における人間関係の事例（1）
第10回	親子における人間関係の事例（2）
第11回	学校での子ども同士の人間関係の事例
第12回	地域社会における人間関係
第13回	人間関係に関する理論（1）個人カウンセリングの理論
第14回	人間関係に関する理論（2）グループアプローチの理論
第15回	人間関係に関する理論（3）グループアプローチの理論
第16回	被災地での支援活動における人間関係づくり

履修上の注意

文献学習だけでなく、体験学習を取り入れて行うので、積極的な参加が望ましい

評価方法

授業中の態度、レポート課題の内容など総合的に評価する

テキスト

適宜 配布資料を用意する

授業概要

臨床心理士やカウンセラーに必要な心身医学の主要な知識について理解を深める。

主要な精神症状と問題行動、精神疾患について講義する。さらに、心身医学と産業精神保健の2テーマについて学習する。講義による知識の習得だけでなく、事例検討を通して、臨床で役立つ実力を養う。心療内科外来診療の陪席実習は、医療の現場を紹介する中で、マンツーマンで実地指導する。毎回、メール相談事例を提出し、回答を考える。カウンセラーとしてのセンスを養うよう講義する。

授業計画

到達目標

1. 心身医学の中心的な考えについて理解する。
2. ストレス関連疾患に対する病態の把握と具体的な援助技法について説明できる。
3. 産業精神保健におけるストレス理論を理解し、その適切な臨床応用を考えることが出来る。
4. 講義とメール相談、陪席等を通して、臨床心理士として将来役立つ心身医学と産業精神保健の知識と技術を修得する。

第 1 回	講義ガイダンス メール相談の実際
第 2 回	心身医学と精神医学の関連性
第 3 回	心身医学（1）心身医学の概念、専門領域の発展
第 4 回	心身医学（2）心身医学の対象、心身相関のメカニズム
第 5 回	心身医学（3）心身症における治療法
第 6 回	産業精神保健（1）職場のメンタルヘルスの現状と課題
第 7 回	産業精神保健（2）職業性ストレスモデル
第 8 回	心療内科外来陪席実習（1）精神科と心療内科とメンタルヘルスセンター
第 9 回	心療内科外来陪席実習（2）気づきとセルフコントロール
第10 回	心療内科外来陪席実習（3）ライフスタイルとサポーター
第11 回	心療内科外来陪席実習（4）全人的医療
第12 回	心療内科外来陪席実習（5）治療的自己の形成
第13 回	心療内科外来陪席実習（6）勤労者医療（働くことの意味）
第14 回	心療内科外来陪席実習（7）予防医療（一次予防、二次予防、三次予防）
第15 回	まとめ

履修上の注意

1. 授業の中で何を学んだかを毎回復習レポートで確認するので、目的意識を持って授業に取り組むことを期待する。
2. 毎回提示するメール相談事例への回答を通して臨床的感性を高めることを期待する。

評価方法

1. 授業の中で展開される質疑応答の様子、提出したレポートの内容などから総合的に評価する。
2. 受講生自身のメンタルヘルスに関するセルフケアへの配慮状況も評価の一つとなる。
3. メール相談に対する回答内容を踏まえて、心理的援助者としての実践能力と態度も評価する。

テキスト

参考文献・DVDとして、山本・曾田（共著）「メンタルヘルス対策の本」（労務行政）、桃谷・山本（共著）「心とからだの健康教室」（新興医学出版社）、山本・江花「メンタルヘルス・セルフチェック」（ぎょうせい）、「Dr. 山本晴義の実戦！心療内科」（DVD2 巻、ケアネット）、山本（監修）「元気な職場をつくるメンタルヘルス」（DVD 全 10 巻、アスパクリエイト）他

授業概要

精神医学の歴史や主な精神障害の概念、治療的な面接法、文学や芸術、文化的活動などとの関わりなど、精神医学全般に渡る講義を行う。それを踏まえて精神医学の中でも臨床上特に重要な位置を占める統合失調症、うつ病、認知症を中心に、実際の臨床場面で患者・家族にどのように接すればよいかという観点から、精神疾患に関する実践的な知識や対応能力が身につくように講義する。

授業計画

到達目標

1. 精神医学の中心概念について深く理解する。
2. 精神医学的な面接法や精神療法について深く理解できる。
3. 臨床上特に重要な精神障害についての理解を深め、実践的な対応能力を修得できる。
4. 社会や文化と精神医学の関わりを幅広く理解できる。

第 1 回	精神医学の歴史
第 2 回	精神障害の概要—診断基準—
第 3 回	精神医学的な面接と倫理的配慮
第 4 回	統合失調症の概念
第 5 回	統合失調症の症状と経過
第 6 回	統合失調症の治療
第 7 回	事例検討
第 8 回	うつ病・躁うつ病の概念
第 9 回	うつ病・躁うつ病の症状と経過
第 10 回	うつ病・躁うつ病の治療
第 11 回	認知症の概念
第 12 回	認知症の症状と経過
第 13 回	認知症の治療
第 14 回	地域精神医療・保健
第 15 回	文学・芸術と精神医学

履修上の注意

1. 各自が臨床的・実践的な関心や問題意識をもって授業に出席するとともに、関連領域の書籍や論文を自発的に読み進むことが望ましい。
2. 講義に際しては、様々な臨床場面を想定して、実際にどのように患者・家族に対応したらよいかという事例的な検討が頻回になされるので、積極的に参加・発言する姿勢が期待される。

評価方法

到達目標と関連して、授業中の発言などの参加度と理解度(40%)、提出されたレポート内容(60%)などを通して総合的に評価する。

テキスト

講義内容に関連した参考文献や資料をその都度紹介・配付する。

授業概要

講義では、主に犯罪・非行心理学の中でも、非行少年や犯罪者の更生に役立つような知識を身につけさせる。その際には、非行少年や犯罪者の成長や自己実現の促進だけでなく、その再非行・再犯を防止するといった観点から、臨床心理士やカウンセラーが果たすことができる役割と、陥りやすい弱点について説明する。さらに、犯罪被害者の精神的被害についても触れ、加害者と被害者双方の心理学的課題についても説明する。また、できるだけ実証的な調査研究から得られた知見を紹介し、実際に再非行・再犯の抑止に結びつくような介入の在り方の習得を目指した講義をする。

授業計画

到達目標

1. 犯罪・非行心理学の考えやアプローチについて理解する
2. 犯罪・非行心理学的な援助技法およびアセスメントについて具体的に説明できる
3. 様々な犯罪・非行心理臨床の現場とその実践の独自性について説明できる
4. 犯罪被害者の精神的被害について説明できる

第 1 回	犯罪・非行心理学とは何か：今日の特徴
第 2 回	犯罪・非行研究の理論的発展と実際
第 3 回	犯罪・非行とパーソナリティ
第 4 回	犯罪・非行と発達障害
第 5 回	犯罪・非行と家族関係
第 6 回	犯罪・非行と学校・職場・地域
第 7 回	犯罪・非行の心理臨床
第 8 回	犯罪者・非行少年の処遇システム
第 9 回	犯罪者・非行少年のアセスメント
第10 回	犯罪者・非行少年のカウンセリング
第11 回	犯罪者・非行少年の治療教育
第12 回	犯罪者・非行少年の家族支援
第13 回	犯罪・非行の態様と介入方法
第14 回	犯罪被害者の精神的被害
第15 回	まとめ：犯罪・非行心理学の課題と展望

履修上の注意

1. 授業ガイダンスで紹介する参考文献等を主体的に自学自習し、問題意識を深めること。
2. 講義に際しては積極的に発言し、教員との意見交換を行い、受講生同士の相互の理解に務めることが期待される。

評価方法

到達目標と関連して、授業中の発言等の参加度と理解度(40%)、提出されたレポート内容(60%)などを通して総合的に評価する。

テキスト

講義内容に関連した参考文献を適宜紹介し、ハンドアウト資料を配付する。

授業概要

臨床健康心理学の目標は、個人が不適応的な状態に陥らないように予防すること、さらにその視点を集団や社会にまで広げ、個人や集団が有する長所や強みを伸ばすことによって、個人と集団の QOL や well-being を維持、向上できるよう支援することである。この授業では、健康心理学の先進的な理論とその臨床的応用のための具体的方法について講義する。後半は、臨床健康心理学に関する研究論文のクリテック課題を通して、最新の知見を得ると共に批判的思考法を身につける。

授業計画

到達目標

1. 前半では、臨床心理学と健康心理学との共通点と相違点について学ぶ。さらに、生活習慣関連の健康リスク問題、個人次元と集団次元のストレス対処、病気対処行動、健康心理学の臨床的展開について学び、その意義を理解することができる。
2. 後半では、臨床健康心理学に関連する研究論文の精読を通して、論文の構成、データ収集方法の妥当性、採用された分析法の理解とその解釈等における問題点の指摘とその批判ができるようになることを目指す。論文クリテックに際しては、著者への尊敬を払いつつもその論文の主張を妄信するのではなく、批判的・生産的に批評・理解できる力を身につける。

(第1回～第7回：小玉正博)

第 1 回	臨床健康心理学とは何か：その基本視点、対象、アプローチ
第 2 回	生活習慣関連の心身健康リスク問題
第 3 回	ストレスとその対処（1）：個人次元の課題
第 4 回	ストレスとその対処（2）：集団次元の課題
第 5 回	病気対処行動：ヘルスケアの視点とその意義
第 6 回	健康心理学の臨床的展開（1）：循環系疾患を中心にして
第 7 回	健康心理学の臨床的展開（2）：ガン疾患を中心にして

(第8回～第15回：羽鳥健司)

第 8 回	成長モデルを扱った研究論文の精読とクリテック
第 9 回	認知行動療法に関する研究論文の精読とクリテック
第10回	Well-beingに関する研究論文の精読とクリテック
第11回	生活習慣関連の研究論文の精読とクリテック
第12回	自尊心に関する研究論文の精読とクリテック
第13回	ストレス対処に関する研究論文の精読とクリテック
第14回	健康行動に関する研究論文の精読とクリテック
第15回	臨床健康心理学のまとめ

履修上の注意

1. 授業ガイダンスでは本授業で扱うトピックスを理解するための基本文献等を紹介するので、受講者はそれらを参考にしながら、主体的に自学自習し、問題意識を深めること。
2. 講義に際しては積極的に発言し、教員と意見交換を行い、受講生相互の理解に務めること。

評価方法

1. 到達目標と関連して、授業中の発言内容（20%）、ワークへの参加度（30%）、提出されたレポート内容（50%）などから評価する。
2. 本授業は、2名の教員によるオムニバス形式の授業であるため、教員ごとに評価がなされるが、単位認定にあたっては総合的に評価される。

テキスト

授業内容に関連した参考文献を適宜紹介するとともにハンドアウト資料を配付するが、事前学習と事後学習のために以下の文献を紹介する。

「島井・長田・小玉（編）「健康心理学・入門」（有斐閣）、「現代のエスプリ ポジティブ心理学の展開」（ぎょうせい）、「ポジティブ心理学」（ナカニシヤ出版）」

授業概要

心理療法の技法には様々なものがあるが、中でも欧米では認知行動療法が最も広く知られている。日本でも認知行動療法は注目されてきており、様々な疾患や生活習慣等に対して高い効果があるという多くのエビデンスが示されている。本講義では、認知行動療法の基本的な考え方や、実施するために必要な実践的な基礎的スキルの習得を目的とする。

授業計画

第1回	ガイダンス
第2回	認知行動療法で扱う「心」の要素
第3回	治療的援助の順序
第4回	共感技法
第5回	情報を得るための質問技法と誘導するための質問技法
第6回	自動思考、条件信念、中核信念
第7回	心理教育
第8回	事例定式化
第9回	目標設定
第10回	週間活動記録と個人実験
第11回	問題解決技法
第12回	階層表の作り方
第13回	認知再構成
第14回	全技法を使ったロールプレイ
第15回	まとめ
第16回	レポート

履修上の注意

ガイダンスに出席しなかった場合は受講を認めない。また、ガイダンスの時に伝える約束事を必ず守る事。自己都合による欠席、または無断欠席のいずれかが一度でもあった場合は、それ以降の受講を認めない。

評価方法

授業内での理解度、参加度、提出されたレポート内容等によって総合的に評価する。

テキスト

資料を配布する。

授業概要

人間の生涯的発達の中で、特に老年期に焦点を当てる。具体的には、生まれてから死ぬまでの生涯発達の過程における老年期の位置づけ、その心理的な意味、老いるとはどういうことなのかについて基本的理解を得る。また、加齢に伴い身体機能、知的機能はどう変化し、そのことが日常生活上にどのような変化をもたらすのかという問いについて、現時点での研究知見を踏まえた上で、問題を抱えた高齢者をどのように理解し、対応したらいいのかに焦点づけ、詳細な事例検討も含めて講義する。

授業計画

到達目標

1. 生涯発達の視点からみた老年期の心理的な特徴について概説できる。
2. 老年期の一般的な心身の変化が日常生活に及ぼす影響について説明できる。
3. 様々な高齢者に対する個別の理解、対応のあり方について理解できる。
4. ケアを必要とする高齢者の理解、支援のあり方について理解できる。

第 1 回	生涯発達の視点から見た老年期
第 2 回	老いるということ 1：身体機能の変化
第 3 回	老いるということ 2：感覚機能の変化
第 4 回	老いるということ 3：心理的適応
第 5 回	知的機能のエイジング 1：加齢変化
第 6 回	知的機能のエイジング 2：アセスメント
第 7 回	知的機能のエイジング 3：機能維持のための方略
第 8 回	老年期の心理的な特徴（まとめ）
第 9 回	高齢者に対する心理的理解と支援 1：支援のための方法論
第 10 回	高齢者に対する心理的理解と支援 2：事例・在宅高齢者（家族同居）
第 11 回	高齢者に対する心理的理解と支援 3：事例・在宅高齢者（一人暮らし）
第 12 回	高齢者に対する心理的理解と支援 4：事例・認知症高齢者（アルツハイマー型）
第 13 回	高齢者に対する心理的理解と支援 5：事例・認知症高齢者（レビー小体型）
第 14 回	高齢者に対する心理的理解と支援 6：事例・施設利用の高齢者
第 15 回	高齢者に対する心理的理解と支援（まとめ）

履修上の注意

1. 授業ガイダンスで紹介するテキスト、参考文献等を主体的に予習し、問題意識を深めること。
2. 講義では教員および他の受講生と積極的な意見交換を行い、授業を作るように務めること。
3. 事例の検討にあたっては受講者同士のグループワークによる討論が行われるので、積極的に参加すること。

評価方法

到達目標と関連して、授業中に課されるミニレポートの内容(30%)、発言等の参加度と理解度(30%)、適宜出される課題レポートの内容(40%)などにより総合的に評価する。

テキスト

「エピソードでつかむ老年心理学 大川他編 ミネルヴァ書房 2011」を使用する。また、授業の内容に応じたレジュメ、資料等を適宜配布する。参考書等は、授業時、適宜、紹介する。

授業概要

障害者（児）分野での心理臨床については、福祉施設での療育やリハビリテーション、子育て支援や保育、教育における特別支援教育、さらに余暇活動や就業など他領域と何らかに関わる。また家族や保護者支援とも関わる。この授業では、障害に関わる代表的な領域での心理臨床に焦点を当て、それぞれの領域での心理臨床の意義や特徴を理解するようにする。関係の深い障害ごとの心理的な特徴とその心理臨床も取り上げ、有効な心理臨床への方向付けも図るようにする。

授業計画

到達目標

- 1 障害者（児）が関係する諸領域での心理臨床の特徴や内容を理解する。
- 2 さまざまな障害の心理的な特徴と心理臨床について理解する。
- 3 障害者（児）の家族支援、保護者支援についても理解する。

第1回	障害者（児）の関係する諸領域とライフスパン
第2回	さまざまな障害と心理臨床的なニーズ
第3回	乳幼児期の問題と心理臨床
第4回	特別支援教育の現状と障害の心理臨床
第5回	障害者の就労・余暇活動と心理臨床
第6回	障害者（児）の家族・保護者支援と心理臨床
第7回	視覚障害・聴覚障害の心理
第8回	知的障害の心理
第9回	身体障害・健康障害の心理
第10回	発達障害の心理～1
第11回	発達障害の心理～2
第12回	障害の発達相談・子育て支援と心理臨床
第13回	障害の教育相談・進路支援と心理臨床
第14回	障害の生活支援・就労支援と心理臨床
第15回	まとめと各自の課題生理

履修上の注意

- 1 障害は一見、身近ではないかもしれないが、普遍的な課題でもあるので、自身の問題意識を確認するところから始めたい。
- 2 映像も入れたい。感想や意見を求めるのでそのつもりで受講されたい。

評価方法

授業中のリアクションペーパー・理解度（40％）、期末レポート（60％）で総合的に評価する。

テキスト

特に用いない。関連資料を配布する。

授業概要

学校現場では、いじめ・不登校・非行など多岐にわたる課題があり実践的な課題の対応に迫られています。学校臨床心理学では、学校生活を送るすべての子どもの成長・発達への援助の在り方や、教師の専門性を尊重し、その専門性を十分に発揮できるような支援を考えていきます。

本講義では、学校臨床心理学の意義と役割を明らかにしたうえで、学校臨床心理学の現状について把握し、今後の活動の在り方を予防、支援、連携等の観点から検討していきます。特に、「いじめ」「不登校」「非行」等の学校で生じている問題を取り上げ、専門的な働きかけをする際に必要となる知識や技法が身につくようにしたいと思います。

授業計画

到達目標

1. 学校臨床心理学の理論と実践について理解する。
2. 学校の現状を理解し、支援できる知識を獲得する。
3. 子どもたちに対する支援を具体的に考えられるようにする。

第1回	ガイダンス
第2回	学校臨床心理学とは
第3回	学校臨床心理の組織と運営
第4回	児童・生徒指導に活かす学校臨床心理学
第5回	教育相談に活かす学校臨床心理学
第6回	特別支援教育に活かす学校教育心理学
第7回	学校臨床における見立て・アセスメント
第8回	不登校の現状と支援の実際
第9回	いじめの現状と支援の実際
第10回	非行の現状と支援の実際
第11回	教師への支援（教師のメンタルヘルス・教師のバーンアウト）
第12回	教師とスクールカウンセラーとの連携
第13回	外部機関との連携
第14回	地域との連携
第15回	保護者との連携
第16回	まとめ

履修上の注意

学校関連の様々な問題に興味・関心を示し、どのように対応したらよいかということを積極的に考え、討論に参加する姿勢が望まれます。

評価方法

講義への参画度 40%、課題レポート 60%

テキスト

以下の文献を参考にしてください。

伊藤美奈子・相馬誠一編著『グラフィック学校臨床心理学』サイエンス社

伊藤美奈子・平野直己編『学校臨床心理学・入門』有斐閣アルマ

授業概要

グループワークについて理論と実践の両面から学ぶ。グループワークのなかにはソーシャルスキル教育、ロールプレイ、対人関係ゲーム、構成的グループエンカウンターなどが含まれている。それぞれの理論的背景、実施方法などを講義、演習を交えながら指導する。演習のなかで実際にグループワークの各技法を深く体験することで、その長所・短所を十分理解しながら将来学校現場または臨床現場において適切に導入できるように講義をする。

授業計画

到達目標

1. グループワークの概念と理論的背景を理解する。
2. グループワークの各手法（ロールプレイ、構成的グループエンカウンター、対人関係ゲーム、ソーシャルスキル教育）の概念と特徴を理解し、実際のワーク体験を通してその効果的な適用方法を習得する。
3. 本講義で学んだワーク・プログラムを実際に活用してグループワークを運営、展開できる。

第 1 回	グループワークの考え方とその実践的展開
第 2 回	心理臨床におけるグループワークの意義
第 3 回	具体例紹介①：ロールプレイの概念と理論的背景
第 4 回	実践：ロールプレイを体験し、気づきや感想、考察を発表する
第 5 回	具体例紹介②：構成的グループエンカウンター概念と理論的背景
第 6 回	実践：構成的グループエンカウンターを体験する
第 7 回	振り返り：体験した気づきや感想、考察を発表する
第 8 回	具体例紹介③：対人関係ゲームの概念と理論的背景
第 9 回	実践：対人関係ゲームを体験する
第10 回	振り返り：体験した気づきや感想、考察を発表する
第11 回	具体例紹介④：ソーシャルスキル教育の概念と理論的背景
第12 回	実践：ソーシャルスキル教育の実際の様子をVTRで学ぶ
第13 回	実践：ソーシャルスキル教育を体験する
第14 回	振り返り：体験した気づきや感想、考察を発表する
第15 回	学習の振り返りとレポート課題の提示

履修上の注意

1. 本講義において各受講者に求められるのは、単にグループワークに関わる知識の習得を目指すのではなく、お互いを認め、尊重するという人間関係への基本姿勢を学ぶことである。
2. そのためには、グループワークにおいて自身が傷ついたり、他者を傷つけることなく、率直で真摯な態度で協同して授業を作り上げる態度で参加して欲しい。

評価方法

到達目標と関連して、授業への参加意欲や態度(50%)およびレポート課題の完成度(50%)などで評価する。

テキスト

- ・ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 図書文化
 - ・対人関係ゲームによる仲間づくり 金子書房
 - ・小学校学級づくり・構成的グループエンカウンター・エクササイズ 50 選 明治図書
 - ・改訂版 アサーション・トレーニング さわやかな〈自己表現〉のために 金子書房
- などを必要に応じて紹介する

授業概要

コミュニケーションと相互影響のある概念を抽出し、それらをさまざまなコミュニケーション状況でとらえることにより、日常の風景と異なる新たな視点でのコミュニケーション理解を目的とする。影響要因として、飲酒・喫煙、いじめなどネガティブ行動に影響がある刺激欲求と権威勾配をとりあげる。これら概念の活用によっては、コミュニケーションがポジティブな影響（ストレス低減、意欲の増大）を及ぼすことの理解を目指して講義する。

授業計画

到達目標

1. コミュニケーションの意義、対面・非対面の特徴を理解できる。
2. 欲求がコミュニケーションに関与し、どのようにネガティブ行動を引き起こすか、そのプロセスを理解することができる。
3. コミュニケーションによって作られた権威勾配状況で行動への影響を理解することができる。
4. ポジティブ行動を生むコミュニケーションについて理解することができる。

第 1 回	コミュニケーション研究の意義
第 2 回	対面的コミュニケーションと非対面的コミュニケーションの構造上の違いと機能の違い
第 3 回	性格や態度などの個人特性と対面的・非対面的コミュニケーションとの相互関係
第 4 回	コミュニケーションと相互関係にある概念①（刺激欲求）の理解
第 5 回	対面的コミュニケーションと刺激欲求-若者の飲酒、喫煙の問題
第 6 回	非対面的コミュニケーションと刺激欲求①-ネット上における非倫理的行動
第 7 回	非対面的コミュニケーションと刺激欲求②-multi task と携帯電話の問題
第 8 回	コミュニケーションが作り上げる組織風土
第 9 回	コミュニケーションと相互関係にある概念②（権威勾配）の理解
第 10 回	対面的コミュニケーションと権威勾配①-組織（学校、企業）のいじめ、体罰などの不健康問題
第 11 回	対面的コミュニケーションと権威勾配②-医療ミスの権威勾配による影響
第 12 回	非対面的コミュニケーションと権威勾配-ネットのいじめやフレーミング
第 13 回	コミュニケーションによるポジティブな影響①-ソーシャルスキルと刺激欲求
第 14 回	コミュニケーションによるポジティブな影響②-権威勾配の修正
第 15 回	総合的な考察

履修上の注意

1. 授業時に紹介する文献を十分に学習し、理解しておくことを期待する。
2. 積極的に議論に参加し、受講者自身で授業を作る気持ちで臨むことを期待する。

評価方法

到達目標に照らして、授業での発言を通して積極的参加度(25%)、到達目標の各事項の理解度(25%)、課題レポート(50%)によって判断し、総合評価を行う。

テキスト

授業時に資料を毎回配布するので、特にテキストはない。参考文献については、適宜紹介する。

授業概要

臨床心理士の主要業務の一つである臨床心理的地域援助の中核を成す分野はコミュニティ心理学である。コミュニティ心理学は治療モデルを中心とするのではなく、予防やコミュニティ資源の向上、非専門家の活動に対する側面的援助、多様な活動・サービス間の連携、間接的援助、プログラムの開発と評価等、個人心理臨床からの発想の転換を要求される領域である。この授業においては、コミュニティ心理学の主要概念を学習すると共に、国内外における主要な実践・研究についてレビューを行う。それを基にして、学生各自が将来コミュニティ心理学に関連した実践・研究を行う上で助力となるよう、考察を深める。講義、ビデオ視聴に加えて、学生による発表と、小グループによるディスカッションなども適宜用いる予定である。

授業計画

到達目標

1. コミュニティ心理学の主要概念を理解する。
2. 臨床心理士の業務におけるコミュニティ心理学の役割について基礎的な理解を得、コミュニティ心理学の知識を自分自身の今後の臨床業務においてどのように用いるか、具体的に考察できる。なお、集中講義のため、受講人数と進捗状況に合わせて、適宜調整しながら授業を行う。

第1回	授業オリエンテーション、コミュニティ心理学の定義と考え方
第2回	コミュニティ心理学の実践例紹介：HIV感染にかかわる援助実践から
第3回	予防の理論的側面
第4回	予防とコミュニティ資源の向上に関する具体的な取り組み
第5回	サポートグループとセルフヘルプグループの具体例
第6回	サポートグループとセルフヘルプグループの機能
第7回	コミュニティ援助プログラムの開発と評価の概要
第8回	コミュニティ援助プログラムの開発と評価の具体例
第9回	コンサルテーションの理論的側面
第10回	コンサルテーションの実践的側面
第11回	学生による発表とディスカッション
第12回	学生による発表とディスカッション
第13回	学生による発表とディスカッション
第14回	学生による発表とディスカッション
第15回	まとめ

履修上の注意

受講生は、臨床心理学に関する基礎的な科目を履修済みであること。指定されたテキストや文献等は各自読んでおくこと。途中で履修を放棄したりするのではなく、積極的に授業に参加することが求められる。

評価方法

- ①クラスにおける発表（20%）
- ②学期末レポート（40%）：学生は、将来自分が勤務すると予想される（希望する）領域（学校、心療内科、学生相談、EAP 等）において、コミュニティアプローチをどのように用いていきたいか、具体的な内容をレポートにまとめ、提出する。先行研究を十分に吟味しながら論を進めること。その内容に関連すると思われるコミュニティ資源についても必ず触れること。A4判用紙5枚以内。字数は問わない。
- ③授業への参加状況（40%）：やむを得ず遅刻あるいは欠席をする場合は、できるだけ事前に講師に申し出ること。それ以外の遅刻・欠席は減点の対象となるので注意すること。

テキスト

金沢吉展(2004)『臨床心理学全書第11巻：臨床心理的コミュニティ援助論』誠信書房

授業概要

臨床社会心理学では、臨床心理学と社会心理学のインターフェイスの領域を、主に社会心理学的アプローチから説明、理解しようとする。これらの領域には、不適応な行動や感情について、①その発現と維持における自己過程、②その評価や診断に関わる認知過程、そして③その治療や予防の対人過程などがあげられる。本講義では、これらの諸過程について最新の研究知見を示すとともに、具体的な例を取り上げながら講義をする。

授業計画

到達目標

1. 不適応な行動や感情の発現と維持における自己過程について理解することができる。
2. 不適応な行動や感情の評価や診断に関わる帰属過程について説明することができる。
3. がん患者と家族への心理社会的介入を例に、その治療や予防における対人過程（ソーシャルサポート、集団力学など）について理解を深めることができる。

第 1 回	オリエンテーション：臨床社会心理学というアプローチの特徴
第 2 回	不適応の発現・維持に関わる自己過程 1：自己意識の発生と病理
第 3 回	不適応の発現・維持に関わる自己過程 2：自己注目と抑うつ
第 4 回	不適応の発現・維持に関わる自己過程 3：自己評価と自尊感情
第 5 回	不適応の発現・維持に関わる自己過程 4：自己呈示と社交不安
第 6 回	不適応の発現・維持に関わる自己過程 5：自己開示と心身の健康
第 7 回	不適応の評価・診断に関わる社会認知過程 1：帰属過程
第 8 回	不適応の評価・診断に関わる社会認知過程 2：推論バイアス、コントロール知覚
第 9 回	不適応の評価・診断に関わる社会認知的過程 3：ストレスとその評価
第 10 回	治療や予防を高める対人過程 1：ソーシャルサポート
第 11 回	治療や予防を高める対人過程 2：治療者のメッセージ
第 12 回	治療や予防を高める対人過程 3：がん患者や家族への心理社会的介入 1
第 13 回	治療や予防を高める対人過程 4：がん患者や家族への心理社会的介入 2（グループダイナミクスからグループ療法へ）
第 14 回	臨床社会心理学のさらなる課題：地域連携と支援（病と共に生きるということ）
第 15 回	授業のまとめ

履修上の注意

1. 授業中に適宜参考文献等を紹介するので、それをもとに学習を進めること。
2. 講義に際しては積極的に発言し、教員との意見交換を行い、受講生同士の相互の理解に務めることが期待される。

評価方法

到達目標と関連して、授業中の質疑応答から見られる理解度と参加度(40%)、提出されたレポートの完成度(60%)などを通して総合的に評価する。

テキスト

授業中に適宜参考文献等を紹介する。参考書としては、以下があげられる。『不適応と臨床的社会心理学』（誠信書房）『臨床社会心理学』（ナカニシヤ出版）、『臨床社会心理学の進歩』（北大路書房）『はじめての臨床社会心理学』（有斐閣）『臨床社会心理学』（東京大学出版）他

授業概要

文化的要因が人のところに与える影響と問題点を把握し、グローバル化のなかで増加しつつある異文化接触や文化間移動によって生じる心理的現象、さらに多文化環境で成長することによるこの問題の理解と深化を目的とする。また、異文化の問題には、国内の地域差や世代差も含まれることを理解し、異文化への理解が地域支援と密接に関連していることを学習する。具体的には、異文化適応の問題、(文化的) アイデンティティ形成、異文化間/多文化間カウンセリングなどに関する最新の知見について講義する。

授業計画**到達目標**

1. 異文化間心理学とは何かを理解する
2. 文化的要因が人のところに与える影響と問題点を把握する
3. 異文化接触および文化間移動によって生じる心理的現象への理解を深める
4. 異文化間/多文化間カウンセリングについての知見を得る

第1回	授業概要および異文化間心理学の課題
第2回	心理学における異文化の問題とは何か
第3回	心理学における文化の問題：文化がところに及ぼす影響
第4回	異文化間心理学研究の方法論的問題 (1) エスノセントリズムへの対応
第5回	異文化間心理学研究の方法論的問題 (2) 個人主義と集団主義のとらえ方
第6回	異文化接触の心理学 (1) 現代社会の多様性への理解とカルチュア・ショック
第7回	異文化接触の心理学 (2) 異文化適応の諸問題
第8回	文化間移動とアイデンティティ (1) 文化的アイデンティティの視点から
第9回	文化間移動とアイデンティティ (2) 自我アイデンティティの視点から
第10回	多文化環境における言語・文化の諸問題：国際結婚家族の事例
第11回	多文化環境における文化的アイデンティティ形成の課題：日系国際児の事例
第12回	異文化間/多文化間カウンセリングの意義
第13回	異文化間/多文化間カウンセリングの視点による地域支援
第14回	異文化理解と地域支援：異文化間心理学的アプローチの応用
第15回	総括

履修上の注意

1. グローバルな視野に立って異なる文化背景をもつ人々にはどのような問題があり得るのか、臨床的関心をもって授業に臨むこと。
2. 異文化理解の視点と地域における文化の多様性、世代間の価値意識の差違などには通底する課題があることを、各自の体験と関連づけて理解すること。

評価方法

到達目標に照らし、授業中の質疑応答(25%)およびリアクションペーパーから把握される理解度(25%)、期末レポートの内容(50%)を勘案し、総合的に評価する。

テキスト

テキストは特に指定しないが、授業の進行に伴い、必要と思われる文献を適宜紹介する。

授業概要

文献検索能力の開発、専門領域の最新知識および研究方法の習得。研究テーマの文献レビューおよび研究方法の吟味を行う。

引き続き討論を通して各自の研究テーマを深化し、中間発表に向けての研究計画の吟味、予備調査の実施、文献レビューの補強等を行い指導する。

授業計画

到達目標

1. 各自の研究テーマに即した文献検索が適切にできる。
2. 各自の研究テーマを先行研究と関連づけて、深めることができる。
3. 各自の研究テーマに即した方法論を展開できる。
4. 各自の研究テーマに即した論文作成を進めることができる。
5. 各自の研究テーマについて、簡潔明瞭にプレゼンテーションすることができる。

＜春期＞		＜秋期＞	
1	修士論文作成に関する総合ガイダンス	1	後期ガイダンスと後期の達成目標について
2	2年間のカリキュラムと見通しについて	2	研究実施にかかわる倫理的問題の吟味
3	1年次の見通しと達成目標について	3	研究デザインの発表(1)：予備的検討
4	研究課題の発表(1)：問題点、課題の探求	4	研究デザインの発表(2)：問題点の吟味
5	研究課題の発表(2)：課題の絞り込み	5	研究デザインの吟味(1)：概念モデルの提示
6	データベースの利用法、論文検索方法を学ぶ	6	研究デザインの吟味(2)：分析モデルの検討
7	研究課題に関わる文献検索	7	研究デザインの発表と吟味(1)：倫理的検討
8	先行研究論文の輪読と討論(1)	8	研究デザインの発表と吟味(2)：調査票原案
9	先行研究論文の輪読と討論(2)	9	予備調査の実施(1)：対象・方法の確認
10	研究の進捗状況確認(1)：文献整理	10	予備調査の実施(2)：実施依頼と結果回収
11	研究の進捗状況確認(2)：テーマ確認	11	予備調査結果の吟味と討論(1)：素データ
12	関連文献の発表と討論(1)：テーマとの関連づけ	12	予備調査結果の吟味と討論(2)：分析手法
13	関連文献の発表と討論(2)：テーマの確認	13	中間発表にむけた研究デザインの吟味
14	研究テーマの絞り込み	14	中間発表にむけた研究デザインの修正
15	前期のまとめ	15	中間発表にむけた研究デザインの確認

履修上の注意

学術的意義とともに人びとの福祉に貢献するという問題意識を持って、主体的に研究に取り組むことが求められる。

評価方法

課題への主体的取り組みとその内容について評価する。

テキスト

研究内容、研究の進捗状況に応じて紹介する

授業概要

現代社会における臨床心理学の諸問題（アイデンティティの拡散、ひきこもり、人間関係の希薄化）について学んだのちに、自分の研究テーマを主として文献的な資料をもとに探索する。文献探索の方法・レジメ作成・発表・ディスカッションの流れのなかで研究能力を身につける。さらに自分の研究テーマの発表、ディスカッションを通じて研究計画や研究方法を検討する。研究方法として行動観察法（フィールドワーク）やインタビュー面接法、アンケート調査法などを学びながら、デザイン発表や中間報告に向けて、研究計画・方法を吟味し、予備調査を実施するなどの指導をする。

授業計画

到達目標

1. 各自の研究テーマに関する文献検索ができる。
2. 各自の研究テーマに関する先行研究をレビューし、テーマを深めることができる。
3. 各自の研究テーマに合致した研究方法論を駆使することができる
4. 各自の研究テーマに関して論文作成を適切に進めることができる。
5. 各自の研究テーマを適切に発表できる。

<前期>		<後期>	
1	修士論文に関するガイダンス	1	後期のガイダンス
2	2年間のカリキュラムの見通しについて	2	研究実施に関わる倫理的問題
3	現代社会における臨床的問題（1）	3	研究デザインの発表（1）予備的検討
4	現代社会における臨床的問題（2）	4	研究デザインの発表（2）問題点の整理
5	研究課題の発表（1）問題点・課題の探求	5	研究デザインの検討（1）
6	研究課題の発表（2）問題点・課題の探求	6	研究デザインの検討（2）
7	先行研究の文献探索とその方法	7	研究デザインの発表と検討（1）
8	研究課題に関する国内外の文献購読（1）	8	研究デザインの発表と検討（2）
9	研究課題に関する国内外の文献購読（2）	9	予備調査の実施（1）
10	研究課題に関する国内外の文献購読（3）	10	予備調査の実施と検討（2）
11	研究課題に関する国内外の文献購読（4）	11	予備調査実施と検討（3）
12	研究の進捗状況の確認（1）文献整理	12	中間発表に向けた発表資料作成
13	研究の進捗状況の確認（2）	13	中間発表に向けた発表練習
14	研究課題の発表と討議（1）	14	中間発表の総括（今後の課題）
15	研究課題の発表と討議（2）	15	研究倫理申請書類作成（1）
16	前期のまとめ、今後の課題	16	研究倫理申請書類作成（2）

履修上の注意

自ら積極的に研究に取り組むこと。

評価方法

研究に関する意欲・態度、発表資料の作成や発表内容などを評価する

テキスト

適宜配付資料を用意する

授業概要

人間の社会的行動に影響を与える諸要因を探り出し、理解を深め、研究を進めるための関係文献を紹介する。文献をもとにしつつ、議論を通して諸要因を確認しつつ、論文作成の方向性を確定する。テーマは教育、福祉、医療を含む社会的行動に関わるものとし、社会心理学的方法による研究を中心とする。中間発表に向け、研究計画を検討し、予備調査を実施することにより、課題を発見し、妥当な研究計画の作成を行っていきけるように指導する。

授業計画

到達目標

1. 研究テーマから適切な課題を導き出せる。
2. 研究テーマに適合する文献検索、収集ができる。
3. 先行研究を研究テーマのために利用し、研究テーマを深めることができる。
4. 研究テーマや予備調査の方法・結果を効果的にプレゼンテーションすることができる。

＜春期＞		＜秋期＞	
1	指導方針の説明、指導教員の研究紹介	1	秋期ガイダンスと研究計画の作成について
2	修士論文完成までのプロセスの説明	2	研究計画の検討①（研究計画ドラフト確認）
3	通年を通しての目標の設定	3	研究計画の検討②（問題点の抽出）
4	受講生の研究関心の発表①（研究関心の確認）	4	研究計画の検討③（研究計画の修正）
5	受講生の研究関心の発表②（関心領域の実現性の検討）	5	研究計画の検討④（倫理的検討と調査項目内容の検討）
6	文献検索指導	6	予備調査の計画①（調査方法と対象の確認）
7	研究テーマの検討①（課題の探索）	7	予備調査の計画②（調査項目に適合する質問項目の作成）
8	研究テーマの検討②（課題の特定）	8	予備調査実施①（調査実施、データ回収、データ入力法の確認）
9	研究テーマに関連した文献についての院生による発表と議論①	9	予備調査実施②（入力データの分析法の確認）
10	研究テーマに関連した文献についての発表と議論②	10	予備調査データの分析ならびに修士論文作成計画書の作成準備①（分析結果の確認）
11	研究テーマに関連した文献についての発表と議論③	11	予備調査データの分析ならびに修士論文作成計画書の作成準備②（分析結果から修士論文の方向性の確認）
12	文献の発表と議論を踏まえての研究テーマの絞り込み	12	予備調査の発表と議論①（本調査実施時の必要項目の検討）
13	テーマ絞り込みによる必要な文献の検討	13	予備調査の発表と議論②（本調査実施時の起こり得る問題の検討）
14	進捗の確認	14	中間発表に向けての研究計画の検討
15	春期のまとめ	15	全体的なまとめ

履修上の注意

最終的な目標は、修士論文の作成である。研究の社会的意義も意識しつつ、問題意識を常にもち、何を明らかにしたいのか、何を検証したいのかを明確にして、履修することを期待する。

評価方法

授業の積極的な参加度、発表時のレジュメ内容、発表、議論の程度ならびに日常の研究姿勢を総合的に評価する。

テキスト

必要な文献については、適宜紹介する。

授業概要

今日における心理臨床を中心とした課題を概観し、自分の興味関心を高めるとともに、問題の所在と研究テーマを明らかにする。研究テーマに則した研究計画および研究方法を立案する。そのために、国内外の先行研究の収集、先行研究のレビューを通じてこれまでの成果と今後の課題の明確化、研究上の倫理的配慮などへの理解を深める。

中間発表に向けて、先行研究のレビューの増強、研究計画と研究方法の精度の向上、必要に応じて予備的研究を実施する。全員が発表と討論に参加し、プレゼンテーション力やクリティカルな読解力や思考力を獲得できるよう指導する。

授業計画

到達目標

1. 研究テーマに即した文献検索が適切にできる。
2. 先行研究の成果と課題を踏まえて、研究テーマを明確化させることができる。
3. 研究テーマに沿った研究計画および研究方法を確立することができる。
4. 研究テーマに沿った論文作成能力を獲得することができる。

＜春期＞		＜秋期＞	
1	修士論文作成に関する総合ガイダンス	1	第1回 後期ガイダンスと後期の達成目標について
2	2年間のカリキュラムと見通しについて	2	アンケート調査の実施、被験者への依頼などにおける倫理的配慮と注意点
3	1年次の見通しと達成目標について	3	研究目的の立案①：予備的検討
4	研究テーマの立案①：教育分野に関する最近の課題と心理臨床の貢献	4	研究目的の立案②：問題と目的の明確化
5	研究テーマの立案②：福祉分野に関する最近の課題と心理臨床の貢献	5	研究方法の立案①：既存の概念モデルの提示
6	研究テーマの立案③：医療分野に関する最近の課題と心理臨床の貢献	6	研究方法の立案②：研究方法の検討
7	論文検索データベースの利用方法、論文検索方法を学ぶ	7	研究方法の立案③：仮説と分析方法の検討
8	研究テーマに関わる学術論文の検索と収集①：日本語文献を中心に	8	研究方法の立案④：倫理的検討
9	研究テーマに関わる学術論文の検索と収集②：英語文献を中心に	9	予備調査の依頼対象、依頼方法、調査内容の発表と検討
10	教育分野に関連した先行研究の発表と討論	10	予備調査の依頼対象、依頼方法、調査内容の確認
11	福祉分野に関連した先行研究の発表と討論	11	予備調査の実施
12	医療分野に関連した先行研究の発表と討論	12	予備調査の結果回収と分析
13	研究テーマの絞り込み	13	予備調査結果の検討
14	研究を行う上での倫理的配慮	14	予備調査で得られた成果のまとめ
15	前期のまとめと研究進捗状況の確認	15	第1回中間発表にむけた研究計画の吟味と修正

履修上の注意

学術的な意義および教育・福祉・医療の臨床現場における実践力を向上させることを念頭に置きながら主体的かつ意欲的に研究に取り組むこと。

評価方法

課題への主体的取り組みとその内容について評価する。

テキスト

研究内容、研究の進捗状況に応じて紹介する。

授業概要

各自の研究テーマを吟味しながら、文献を踏まえて研究計画を作成します。その上で、各自の研究テーマを決定していきます。研究テーマに沿って、先行研究の成果を検討します。さらに、研究テーマを絞り込み、中間発表にむけて、研究計画・方法について議論を深め、予備調査を実施します。そこから、今後の課題を明確にし、より妥当な研究計画を立てられるように指導していきます。

授業計画

到達目標

1. 各自の研究テーマに関連した適切な文献検索ができる。
2. 先行研究と関連付けて、研究テーマを深めることができる。
3. 研究テーマに即した研究計画、研究方法を確立できる。
4. 研究テーマについて、適切にプレゼンテーションすることができる。

<前期>		<後期>	
1	前期ガイダンス	1	後期ガイダンス
2	修士論文作成までの見通しについて	2	研究実施に関する倫理的問題について
3	1年次の見通し・目標設定	3	研究デザインの発表1（予備的検討）
4	研究関心領域の確認	4	研究デザインの発表2（問題点の検討）
5	研究関心領域の絞り込み	5	研究デザインの吟味1
6	文献検索について	6	研究デザインの吟味2
7	文献発表・議論1（明らかになっていることの整理）	7	研究デザインの発表・検討1
8	文献発表・議論2（未解決な問題の整理）	8	研究デザインの発表・検討2
9	文献発表・議論3（オリジナルな研究を構想する）	9	研究デザインの発表・検討3
10	研究テーマの検討1（研究課題の探索）	10	予備調査の実施1
11	研究テーマの検討2（研究課題の特定）	11	予備調査の実施2
12	研究テーマの発表I（研究テーマの吟味）	12	予備調査の吟味1
13	研究テーマの発表2（研究テーマの修正）	13	予備調査の吟味2
14	研究テーマの発表3（研究テーマの確認）	14	予備調査結果をもとにした研究計画の検討
15	進捗状況の確認・問題点の確認	15	中間発表に向けて
16	前期のまとめ	16	後期のまとめ

履修上の注意

日ごろから研究に関連する資料を読み、まとめておくようにしてください。また、議論だけで終わらずに文書の形にまとめるようにしてください。

評価方法

研究に対する意欲・態度、作成した資料、発表内容などで評価します。

テキスト

必要な文献については適宜、紹介します。

授業概要

明らかにしたい臨床心理学的な現象を特定し、おおまかな研究テーマを決定できるように指導する。次に、関連する最新の先行研究をレビューし、研究テーマとの関係性を検討させる。さらに、議論を通して詳細な研究テーマを決定し、測定や分析の方法も含めて、研究全体の計画を立て、予備調査を実施するよう指導する。その後も、引き続き、必要な先行研究のレビューを行い、指導する。

授業計画

到達目標

1. 究明したい現象を臨床心理学的に位置づける能力を身につける。
2. 研究テーマに関連する先行研究を検索し、研究テーマとの異動を検討することができる。
3. 研究テーマを表現するための方法論を身につける。
4. 研究テーマを論理的に論述し、論文を作成することができる。
5. 研究テーマをプレゼンテーションすることができる。

＜春期＞		＜秋期＞	
1	修士論文作成の概要	1	授業のガイダンスと後期の到達目標の説明
2	修士論文完成までの見通しについて	2	研究の実施に関連する倫理的配慮について
3	1年次の到達目標に関する説明	3	研究計画の発表（1）：到達点の確認
4	各自の研究テーマの発表（1）：	4	研究計画の発表（2）：問題点の検討
5	各自の研究テーマの発表（2）：テーマの絞り込み	5	研究計画の発表（3）：研究目的について
6	先行研究の検索方法を学習する。	6	研究計画の発表（4）：方法論について
7	各自のテーマに関連する先行研究の検討（1）：歴史的に重要な文献を中心に	7	研究計画の発表（5）：概念モデルの検討
8	各自のテーマに関連する先行研究の検討（2）：最新の研究を中心に	8	研究計画の発表（6）：実験計画の策定
9	先行研究と各自のテーマとの関連について（1）：相違点の検討	9	研究計画の発表（7）：分析方法の検討
10	先行研究と各自のテーマとの関連について（2）：類似点の検討	10	研究計画の発表（8）：予備データ取得の依頼と回収
11	研究の進捗状況確認（1）：研究テーマの吟味	11	予備調査の実施と結果の発表（1）：取得した予備データの検討と入力
12	研究の進捗状況確認（2）：研究テーマの修正	12	予備調査の実施と結果の発表（2）：予備分析結果の発表
13	研究の進捗状況確認（3）：研究テーマの確認	13	中間発表にむけて（1）：デザイン修正個所の確認
14	研究テーマの絞り込み	14	中間発表にむけて（2）：デザインの修正
15	前期のまとめ	15	後期のまとめ

履修上の注意

各自の関心のみに基づいた研究を行うのではなく、実施する研究の学術的および社会的意義がどのようなものなのかを常に意識し、研究参加者の利益が守られるよう謙虚な姿勢で研究に取り組むことが求められる。

評価方法

研究課題への積極的な取り組み、およびその内容について評価する。

テキスト

適宜紹介する

授業概要

興味・関心のある研究課題領域の先行研究をレビューし、研究課題の具体化を図る。先行研究のレビューを進めながら、自らの研究の位置づけを図り、実行可能な研究デザイン立案に向けて考えを進める。先行研究のレビューを進めながら研究デザインの具体化を図り、この段階で予備調査を実施し、本調査へと向けたデータ、資料を得ることを目指す。

授業計画

<前期>		<後期>	
1	研究課題についての討論	1	研究デザインの構想/先行研究レビューに基づく討論⑤
2	研究課題の具体化/先行研究レビューに基づく討論①	2	研究デザインの構想/先行研究レビューに基づく討論⑥
3	研究課題の具体化/先行研究レビューに基づく討論②	3	研究デザインの構想/先行研究レビューに基づく討論⑦
4	研究課題の具体化/先行研究レビューに基づく討論③	4	研究デザインの構想/先行研究レビューに基づく討論⑧
5	研究課題の具体化/先行研究レビューに基づく討論④	5	研究デザインの立案/先行研究レビューに基づく討論①
6	研究課題の具体化/先行研究レビューに基づく討論⑤	6	研究デザインの立案/先行研究レビューに基づく討論②
7	研究課題の具体化/先行研究レビューに基づく討論⑥	7	研究デザインの立案/先行研究レビューに基づく討論③
8	研究課題の具体化/先行研究レビューに基づく討論⑦	8	研究デザインの立案/先行研究レビューに基づく討論④
9	研究課題の具体化/先行研究レビューに基づく討論⑧	9	研究デザインの立案/先行研究レビューに基づく討論⑤
10	研究課題の具体化/先行研究レビューに基づく討論⑨	10	予備調査準備および討論①
11	研究課題の具体化/先行研究レビューに基づく討論⑩	11	予備調査準備および討論②
12	研究デザインの構想/先行研究レビューに基づく討論①	12	予備調査準備および討論③
13	研究デザインの構想/先行研究レビューに基づく討論②	13	予備調査準備および討論④
14	研究デザインの構想/先行研究レビューに基づく討論③	14	予備調査実施/データの分析と討論①
15	研究デザインの構想/先行研究レビューに基づく討論④	15	予備調査実施/データの分析と討論②

履修上の注意

自ら主体的、積極的に取り組むこと。

評価方法

研究デザイン立案の到達度によって評価する。

テキスト

とくに使用しない。適宜紹介する。

授業概要

中間発表において客観的評価を受け、同時に新たに明らかにされた課題についての解決を通して、より高度な研究展開と完成を目指す。

予備調査、本調査などによって収集された資料の分析の方法、視点を提示・討論しながら、策定された研究課題の達成状況を確認し、修士論文の完成を目指した指導をする。

授業計画

到達目標

1. 各自の研究課題に即した研究計画が策定出来る。
2. 各自の研究課題に即した計画を実施することができる。
3. 各自の実施した研究課題について適切な分析を行い、論文を作成することができる。
4. 各自の研究課題について適切にプレゼンテーションすることができる。

＜春期＞		＜秋期＞	
1	修士論文作成に関する総合ガイダンス	1	後期ガイダンスと後期の達成目標について
2	第1回中間発表に向けた研究デザインの確認	2	本調査結果と分析と考察の討論(1)
3	第1回中間発表の予演と討論(1)：問題の確認と修正	3	本調査結果と分析と考察の討論(2)
4	第1回中間発表の予演と討論(2)：再確認	4	第2回中間発表の予演と討論(1)
5	中間発表の評価と本調査の研究計画の発表	5	第2回中間発表の予演と討論(2)
6	本調査の研究計画の吟味(1)：目的の確認	6	修士論文のプロット作成と課題の吟味
7	本調査の研究計画の吟味(2)：方法の確認	7	修士論文のプロットの修正と吟味
8	本調査の研究計画の吟味(3)：結果分析の確認	8	論文ドラフトの作成：序論
9	本調査の研究計画の吟味(4)：倫理的検討	9	論文ドラフトの作成：目的と方法
10	研究進捗状況に関する中間総括	10	論文ドラフトの作成：結果と考察
11	本調査の実施報告(1)：データの確認	11	論文ドラフトの作成：全体の吟味
12	本調査の実施報告(2)：要約の作成	12	修士論文発表の予演(1)：プロット作成
13	本調査結果のデータ分析(1)：素データ	13	修士論文発表の予演(2)：プロットの修正
14	本調査結果のデータ分析(2)：分析モデル	14	修士論文発表と質疑応答
15	前期のまとめと研究進捗状況の確認	15	まとめと今後の課題の確認

履修上の注意

計画に沿って着実に研究を進めること。また、学術的意義とともに人びとの福祉に貢献するという問題意識を持って、主体的に研究に取り組む態度が求められる。

評価方法

論文作成へ取り組む姿勢、意欲、態度、進捗状況に加えて、修士論文の完成度によって評価する。

テキスト

研究内容、研究の進捗状況に応じて紹介する

授業概要

中間発表において指摘され検討を要する課題について精査して、本調査・本研究に向かって準備・検討を行う。本調査の実施を行い、得られたデータや資料をもとに、ディスカッションと分析を加えて研究報告をまとめる。修士論文の完成にむけて調査データや観察データの考察を行い、論文としての完成度をあげるよう指導する。

授業計画

到達目標

1. 各自の研究課題に関する研究計画を作成することができる。
2. 各自の研究課題に関する研究計画を実施することができる。
3. 各自の実施した研究課題について適切な分析を行い、論文を完成することができる。
4. 各自の研究課題について適切に発表をおこなうことができる。

<前期>		<後期>	
1	修士論文ガイダンス	1	後期修士論文ガイダンス
2	第1回中間発表に向けて研究計画の検討	2	本調査の結果と考察(1)
3	中間発表の予行演習(プレゼンテーション)と検討(1)	3	本調査の結果と考察(2)
4	中間発表の予行演習(プレゼンテーション)と検討(2)	4	本調査の結果と考察(3)
5	中間発表の結果の検討	5	本調査の結果と考察(4)
6	本調査の研究計画の検討(1)	6	学会研究発表準備(1)
7	本調査の研究計画の検討(2)	7	学会研究発表準備(2)
8	研究倫理申請書類作成	8	第2回中間発表準備(1)
9	本調査の実施と報告(1)	9	第2回中間発表準備(2)
10	本調査の実施と報告(2)	10	第2回中間発表練習
11	本調査の実施と報告(3)	11	中間発表総括
12	本調査の実施と報告(4)	12	修士論文指導(1)
13	本調査のデータ分析と討論(1)	13	修士論文指導(2)
14	本調査のデータ分析と討論(2)	14	修士論文発表審査会に向けた指導(1)
15	本調査のデータ分析と討論(3)	15	修士論文発表審査会に向けた指導(2)
16	研究の進捗状況の確認	16	修士論文完成

履修上の注意

修士論文の完成にむけて自主的に取り組み、研究の楽しさ、知る、調べる、喜びを経験する。

評価方法

修士論文の取り組み意欲・態度、修士論文の内容などを総合的に評価する

テキスト

適宜 資料を配布する

授業概要

年間を通しての指導、ならびに中間発表における指導によって明確になった課題を解決し、より高度な研究へと発展をさせる。予備調査、本調査を通して、調査の企画、実施から発表までの研究の全過程を専門的に高いレベルで経験させるようにする。研究の方向性を常に確認しつつ、調査方法や分析の視点の提示や議論を行うことによって、修士論文の完成を目標とした指導を行う。

授業計画

到達目標

1. 研究課題に適合した研究計画が策定できる。
2. 研究課題を解決するためのデータ解析を適切に処理できる。
3. 高い論理的な構成員力によって、論文を作成することができる。
4. 修士論文について説得性・納得性の高い効果的なプレゼンテーションができる。

＜春期＞		＜秋期＞	
1	修士論文に関する総合ガイダンス	1	修士論文作成に向けてのガイダンス
2	研究計画の発表	2	本調査分析結果と考察の検討①（先行研究と結果の検討）
3	第1回中間発表予行演習①（発表内容の確認と修正）	3	本調査分析結果と考察の検討②（考察のシナリオの検討）
4	第1回中間発表予行演習②（内容確定）	4	第2回中間発表予行演習①（発表内容の確認と修正）
5	本調査の計画①（調査対象者、調査変数の確認）	5	第2回中間発表予行演習②（内容確定）
6	本調査の計画②（分析案作成；全体的な分析の流れ）	6	第2回中間発表評価を踏まえての議論
7	本調査の計画③（分析案作成；詳細分析案）	7	修士論文構成案（目次）の作成と議論
8	本調査の計画④（計画の修正）	8	修士論文草稿の作成①（序論）
9	本調査の実施と分析案修正①（詳細分析案の修正）	9	修士論文草稿の作成②（目的と方法）
10	本調査の実施と分析案修正②（詳細分析案確定）	10	修士論文草稿の作成③（結果）
11	本調査の分析結果の討論①（結果の検討）	11	修士論文草稿の作成④（考察）
12	本調査の分析結果の討論②（追加分析案の検討）	12	修士論文発表の予行演習①（発表内容の確認と修正）
13	本調査の分析結果の討論③（追加分析の検討）	13	修士論文発表の予行演習②（内容確定）
14	本調査の分析結果の討論④（考察に向けての討論）	14	修士論文発表と質疑応答
15	進捗確認と春期まとめ	15	修士論文の全体的なまとめと展望

履修上の注意

研究の学術的意義を意識し、社会的な貢献も考慮しつつ、主体的に研究の完成を目指すように努力することを期待する。

評価方法

出席、意見等の参加性の程度、発表会における発表の仕方、修士論文の完成度によって評価する。

テキスト

必要な参考文献は適宜、紹介する。

授業概要

中間発表をおこない、他者からの評価・指摘・意見を踏まえて、研究計画および研究方法の再検討および修正をおこない、より高度な研究を目指す。

予備研究、本研究で収集した資料、データを分析し、その結果を目的・仮説と照らしながら、発表および討論を繰り返しながら考察を深めていく。自分の研究について、先行研究に対する研究成果と新たな知見、および、今後の課題を明確にし、修士論文の完成を目指して指導する。

授業計画

1. 中間発表を行い、質疑に対して適切に応答することができる。
2. 中間発表での意見や指摘を踏まえて、研究計画の精度を高めることができる。
3. 倫理的配慮を満たした上で、研究計画を実行することができる。
4. 得られた研究結果を適切に分析し、結果の解釈をおこない、論文としてまとめることができる。
5. 中間発表や修士論文発表において、自分の研究を適切にプレゼンテーションすることができる。

＜春期＞		＜秋期＞	
1	修士論文作成に関する総合ガイダンス	1	後期ガイダンスと後期の達成目標について
2	第1回中間発表に向けた研究計画の確認	2	本調査結果の分析と考察の討論①：分析結果
3	第1回中間発表のリハーサルと討論①：問題、目的、仮説の確認と修正	3	本調査結果の分析と考察の討論①：考察
4	第1回中間発表のリハーサルと討論②：分析方法、結果の予測、考察の視点の確認と修正	4	第2回中間発表のリハーサルと討論
5	第1回中間発表と質疑応答	5	第2回中間発表と質疑応答
6	本調査の研究計画の吟味①：問題と目的の確認	6	修士論文プロット作成
7	本調査の研究計画の吟味②：方法の確認	7	修士論文のプロットの修正
8	本調査の研究計画の吟味③：分析方法の確認	8	修士論文の原稿作成①：序論
9	本調査の研究計画の吟味④：倫理的配慮の検討	9	修士論文の原稿作成②：問題、目的、仮説、方法
10	研究進捗状況の中間総括	10	修士論文の原稿作成①：結果と考察
11	本調査の実施の報告①：実施状況や回収率の報告	11	修士論文の原稿作成①：全体の吟味
12	本調査の実施の報告②：データの確認と要約	12	修士論文発表のリハーサル①：プロットの作成
13	結果の分析①：素データ	13	修士論文発表のリハーサル②：プロットの修正
14	結果の分析②：分析モデル	14	修士論文発表と質疑応答
15	前期のまとめと研究進捗状況の確認	15	まとめと今後の課題の確認

履修上の注意

研究計画に沿って、地道に研究を進めること。研究を通じて、教育・福祉・医療おける現場の発展と課題の解決に貢献するという意識を常に念頭に置きながら、主体的かつ意欲的に研究活動に取り組むこと。

評価方法

修士論文作成へ取り組む姿勢、意欲、態度に加えて、完成した修士論文の完成度によって評価する。

テキスト

研究内容、研究の進捗状況に応じて紹介する。

授業概要

中間発表において受けた指導により明らかになった課題の修正を行い、研究を発展させ、修士論文の到達点を決定し、データの収集を行う。次に、収集したデータの分析方法や、検討する現象の理論的な位置づけ等に関する最終的な確認を行い、修士論文を作成するよう指導する。

授業計画

到達目標

1. 研究課題を明確にし、課題に到達するための計画を立てることができる。
2. 研究課題を達成するための方法を検討し、実施することができる。
3. 研究課題に即した分析を実施し、修士論文を作成することができる。
4. 作成した修士論文に基づいて、明瞭簡潔にプレゼンテーションすることができる。

＜春期＞		＜秋期＞	
1	修士論文作成に向けた総合ガイダンス	1	後期の達成目標に関するガイダンス
2	各自の研究計画の発表	2	各自の経過報告
3	第1回中間発表の発表練習（1）：研究目的と方法の確認	3	第2回中間発表の発表練習：グループ（1）
4	第1回中間発表の発表練習（2）：分析方法と結果の確認	4	第2回中間発表の発表練習：グループ（2）
5	中間発表の評価の吟味	5	中間発表の評価と分析方法や研究意義の調整
6	研究の方向性に関する最終的な確認	6	修士論文の現実的な到達点の吟味（1）：分析手法の確認
7	本調査の実施計画の発表と討議（1）：研究目的の吟味	7	修士論文の現実的な到達点の吟味（2）：分析結果の確認
8	本調査の実施計画の発表と討議（2）：研究方法の吟味	8	修士論文草稿の作成（1）：要約の作成
9	本調査の実施計画の発表と討議（3）：分析手法の吟味	9	修士論文草稿の作成（2）：問題と目的
10	本調査の実施計画の発表と討議（4）：結果の予測	10	修士論文草稿の作成（3）：方法と結果
11	本調査の実施（1）：倫理的配慮の確認	11	修士論文草稿の作成（4）：結果と考察
12	本調査の実施（2）：ローデータ取得と入力	12	修士論文発表の予行演習（1）：プレゼンテーション方法の確認
13	本調査の実施（3）：分析結果の報告	13	修士論文発表の予行演習（2）：全体の確認
14	研究進捗状況に関する総合的な評価	14	修士論文発表と質疑応答
15	前期のまとめ	15	修士論文のまとめ

履修上の注意

特別課題研究Ⅰで習得した修士論文作成のための方法論を駆使して、データ収集や分析等の実務的な学習が中心となる。課題作成に向けて、これまで以上に自発的な態度が求められる。

評価方法

研究課題への積極的な取り組み、およびその内容について評価する。

テキスト

適宜紹介する。